

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第84回

ハリーコ・アダッチオの夢世界 あるアマチュア日曜陶藝家の生活と意見

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学)

ハリーコ・アダッチオ先生は開業医である。専門は循環器だそうで、かく申す小生が、積年の肥満体を抱え、高血圧症患者として参上すると、一見して、こうおっしゃった。「細く長いのも人生、太く短いのも人生。まあ人生それぞれ」。なるほどエックス線で胸部大動脈をみると、肩甲骨の下のあたりで、「スポーツ心臓」(!) から上に伸びたヤツが、無骨に膨れている。毎晩缶ビール二本に葡萄酒が一本、それがおわって三日でウイスキー瓶がひとつお陀仏になる生活を20年もつづけると、天罰顔面である。アダッチオ先生のお論しの功德か、この写真に驚愕して、しばらく、ぶつりと酒を断つと、半年足らずで体重が一割強ばかりも減った。再度参上すると、いわく、「この写真、前のと比べてご覧。まるで別人や」。なるほど、いかつい影を映していた動脈は、何処とも知れずきれいに消滅してしまって、なにやら優しげで、いささか頼りない管の写真に置き換わっていた。アダッチオ医院に足をむけては寝られぬゆえである。

さてアダッチオ先生には、隠れなきご趣味がある。作陶である。といっても間違っ
てはいけない。妙に通ぶった茶器を辛気臭く焼く、というようなご傾倒ではまったくない。患者のカルテとは違って、既往症をきちんと記録に取ってはおられぬらしく、どれがいつの作品やら、あまり正確な年代は、もはや記憶にとどめてはおいででない。とはいえ、拝見していて、とにかく呆れるのは、一作ごとにながらりと技法を変えてし

まい、しかも零からの新技法に、そのたびに律儀に挑戦して、倦むことがない、その精神なのだ。

技法探求の遍歴

わりと初期の頃の遊びらしい品に、ササン朝から唐三彩への途上で、古代イランからシルクロードを経る交易の道を辿ったような、釉薬の実験を楽しんだかに見える皿がある。深緑を湛えて、ふたつ対になっているが、古代の原作がせいぜい800℃くらい、比較的低温での焼成なのに比べて、叩いてみると音が違う。窯のほうは1200℃を越える高温にして、しっかり焼き締めた硬質な肌をつくりながら、その陶土の表面には、蠟をたらして釉薬をはじく封を施し、その周囲に釉薬の文様を躍らせてみせたりしている。さらによく見ると、その釉薬の下には、なにやら古めかしい文様が黒く沈み、あるいは浮かんでいる。同一技法の対の皿かとおもっていたのに、一方には掻き落としで孔雀が描いてあり[図1]、他方には、聞きそびれたが、どうやらそれとは違って筆を手に取り描いた唐草文様、といった具合である。絵つけの腕も、これはシロウトと甘くみてはおられぬぞ。涼しい顔をしておきながら、この町医者御大、なかなかの凝り性である。

もちろん陶藝であるから、お茶碗も捻っておられる。驚いたことに、白い粒つぶが表面を覆う志野もあれば、赤・黒・白の楽焼もある。ひとりでもよくまあこれだけ手



図1 白泥掻落二彩盤 撮影：稲賀繁美

だすものである。志野など、専門家はそればかりにご専心だから良いのだろうが、一度はやってみたい、といった手合いには、長石の入手から焼成まで、わからぬことだらけというのが相場で、おまけにそのあたりの痺いところに手の届くような技法書は、世におこなわれてはおらぬそう。楽焼などというのも、普通の電気窯やガス窯ではできぬ相談だから、訝しがってみると、なんと工房に自ら煉瓦で囲いをつくって、そこで木炭の炎を吹いて捨えるのだ、とおっしゃる。でも甗はひとりでは無理でしょうに、とたずねると、そこは仲間を集って窯入れする、というのだから本格派である。

楽焼は普通なら木炭に甗で真っ赤に焼けた手握ねを水桶に漬けて急冷する。実際に本格的に挑戦すると、甗から飛ぶ火の粉で火傷もするし、熱湯は跳ね、水蒸気は濛々——これでは大変だし「怖い」ので、われらがアダッチオ先生は、稲藁か籾殻を入れた一斗缶に茶碗を移すや、すぐ蓋をして仕舞われる、のだそう。それでも、冷ますうちにばちん・ぼろりと割れたり、ボンと罅が入ったりの犠牲者が続出する。展示に耐える作品にも、めだたぬように金つぎが施してあったりするのだが、その影には、数等倍の数のお釈迦様、惨めな残骸の山が控えておられるらしい。そうした試みの「力作」の列のあいまには、丹波の山奥から出現したような、のっそりとした歪な器が、

井戸茶碗のような居住まいで、ご立派にも平然と並んでいる。何うと、やはり、これがひときわお気に入りの一品であった。

やや大柄な向こう付けが並んでいる。石膏型に粘土を貼り付ける技法だが、これも何とはない斑の模様は、絵付けではなく、灰色の粘土と、それに鉄ベンガラを加えたものを交互に練りこんだものという。収縮率の違いから割れるのを防ぐ技法だが、並の努力ではない。話題はおのずと、佐渡出身の人間国宝、伊藤赤水だか（無知な対話者にはよく分からぬが）、若くして亡くなった加守田章二のことにも繋がってゆく。要するに、わが「大将」はいろんな技法を試してみたくて仕方がないのだろう。好奇心が旺盛なのか、それとも飽きっぽいのか、いずれにしても、そんな詮索癖に同調して気長に付き合ってくれるほどの輩でもなくては、縦横に試した技法のあれこれを事細かに語る相手には、いささか事欠くのやもしれぬ風情である。

傍らには素朴な手触りの蓋つき茶碗もひと揃いあり、これにはくすんだ茶と青の帯が放射状に塗ってある。幾分ずんぐりとして浅手の椀だから、いかにも秋の食卓にお似合いだ。栗ご飯でも、キノコの炊き込みでも、また春ならば筍ご飯などを盛って、掌に巡らせば、その温かみも心地よいことだろう。

欧風趣味の発露

だがそんな和風の趣とは対極の風土において、アダッチオ先生の思わぬ本領が発揮されるのである。まずはずらりと並んだ水差し。ドイツやイギリスで18世紀あたりまではごく普通の家庭でつかわれていた、ピッチャーといった出で立ちの、素朴な筒型の陶質容器である。心持ち膨らんだ肩口のあたりに、むこうの慣習の印が押しあてられているが、実際には東南アジアのどこやらからの土産の印籠なのだという。注ぎ口も突き出たり、引っ込んだりして、うまく水が注げるか、いささか心もとない造作の代物たちも混じる。いやそればかりか、酒な

ど実際に注いだら、水漏れするものもあるかもしれない、とは謙遜な陶工の告白である。ビールやワインを注げば、それは食卓にどっかりと落ち着いた重量感を授けるだろうに。だがかれらは、花器の分際で自足するほかない。惜しむべし、無為をかこつ水差したちの、空虚なる腹のうち。あわれ、われらがアダッチオ先生は、まったくの下戸にして、酒精はこれっぽっちも聞こし召さぬのである。

この小柄で朴訥な雰囲気の町医者は、若い時分にはさぞかしの美男子だったのだろうが、その面影を控えめに背後に押しやって、いまや孫たちに囲まれた幸せなお爺さんを演じている。切れ者の知性と、鋭い観察眼、それに底知れぬ探究心は、ひたすら温容の下に巧みに隠しつつ、われらが粘土細工師は、ここのところ、お医者様稼業の多忙の合間を縫っては、ひそかな大工仕事に熱中しておられるものと見える。

いや、そのまえに、ハコモノの技法となれば、革装の本のいでたちを、これまた信楽で再現しよう、などという趣向もあった。古色蒼然たる擬似皮革のセラミック製・舶来書籍のうえには、戦前の丸善でもあるまいに、黄色の檸檬がひとつ鎮座して、爆発する時を待っている [図2]。梶井基次郎の世界である。このレモンも、底に穴のあいた焼き物なのだが、志野焼き譲りのゆず肌までは、なかなか再現できないような。そういえば荒木高子には聖書の焼き物シリーズなんかがありましたね、と水をむけると、お師匠は、あれは絶品、とご謙遜。八木一夫にも陶器で拵えた本が幾つもあった、なかには白化粧など施した伊達ものもあるが、これは開いて読めない知識の宝庫という皮肉だろう。ありきたりの壺や茶碗の焼き物には飽きてしまったわが医学博士のご関心はといえば、まずは割れないような陶磁の箱を焼く技術の確立にある。

そのあたりから、ざらの花瓶や茶器はご卒業遊ばして、アダッチオ先生は、粘土板に手を出した。平たく伸ばした生な粘土の薄板を加工しては、それで立体に組み合わ

せ、窯で焼き固める。こうして、ひとつ、ひとつと、石造りの家屋が魔法のように登場した。やがてそれが嵩じて、すこし小振りな焼成粘土の家々を並べてゆくと、異国の街路から、広場まで構えた町並みやらが、あちらまたこちらへと、増殖をはじめたのである。焼かれた粘土はいやでも反るから、個々の家々は、日本基準の仕上げから判断すれば、いささか不恰好な凹凸を宿してもいるのだが、それも一列に並べられると、お互いの隙間を隠しつつ、どっしりとした家並みを誇ってみせる。緩やかに波打っているところは、李朝白磁の左右不对称のおやかさに通じ、ガタピシしたあたりは韓国の葉簞筒の引き出しを思わせる。花森安治言う「不揃いの美学」である。

信楽焼きの欧風建築

作者の自嘲によれば、ずいぶんとけったいな技法がこれらの泥作りの家々を成り立たせているような。なにやら深みのある洋館の壁の色肌は、じつは信楽焼き。狸の化けた姿だった。粗目の土と、肌理の細かな土とで、焼成の色合いも、がらりと変わる。それが登り窯の炎の具合と、微妙なる化学変化とのおかげで、不思議な色のむらなし、粘土板にいかにも古く使い込まれた壁のような深みを醸し出す。不規則で不恰好な壁といったが、実はこうみえても、様に

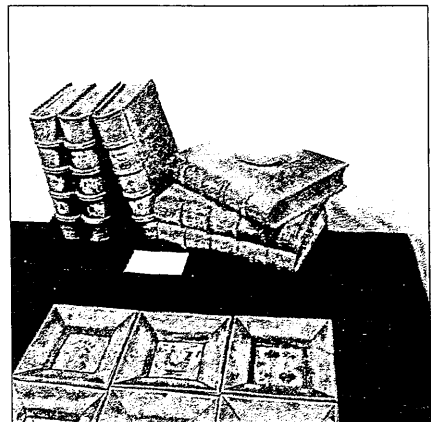


図2 檸檬（自然釉焼締の本に陶製色塗りレモン）
撮影：稲賀繁美

なるように焼成するには、陰では並々ならぬ努力が傾けられている。そもそも粘土でつくった立方体を閉じてしまえば、外部と内部とで、乾く速さが違いすぎる。そんな生乾きを窯にくべようものなら、炎の洗礼のなかで、あっというまに亀裂が走る。加熱のあいだはなんとか保っても、今度は冷ますうちに壁面が破断してしまう。それを防ぐには、生の粘土で整形がおわるや、手早くビニールをかぶせて半密封状態にして、数カ月も寝かし、内壁と外壁とが同様に乾燥するようにと手間隙をかけてやらねばならぬ。いささかも得意げな素振りなどみせず、町医者はそう説明してみせる。

もともとは、ずいぶんと大振りな一軒家の家の模型ができたらしい。陸奥の蕨葺きの農家が、豊かな湾曲ある屋根を、釉葉でかてかとおもえさせる。かとおもえば、実際に旅に出かけた、イギリス中部はコッツウォールの丘陵の村で目にした田舎屋。蜂蜜色の石灰岩を重ねた、大きな軒の出っ張った丸屋根にすっぽり覆われた、おおらかな木組みの家が、素焼きの肌合いで再現される。どうしてイギリスのひとたちは、ひたすら実用陶磁器ばかりを焼いて、自分たちの家を陶土でなぞってみることはしなかったのだろうか。さらにはアイルランド西岸の、荒涼たるアラン島の民家〔図3〕。屋根は海岸に打ち寄せられた海草で葺かれることもあるという。いまでこそ白い羊毛手織りのセーターが著名だが、実際には青年男子は藍染を着ることが多かった。牧羊と漁労に頼った、その質朴にして過酷な生活は、切妻をつくる交差した石積の不規則な反復のうちに、深い陰影をこめて染み込んで居る。それに比べると、ロワール峡谷にそった二階家の農場や、ポヘミヤの中庭つきの囲い屋は、なんと裕福な富の香りを宿しつつ、それを周囲に発散していることか。

そうした粘土版の家屋模型を見てみると、ふと、中国漢代の明器としての灰陶の屋形模型すらもが、懐かしく思い出されてくる。

『空間の詩学』を著したガストン・バシュラールには『大地と休息の夢想』という著

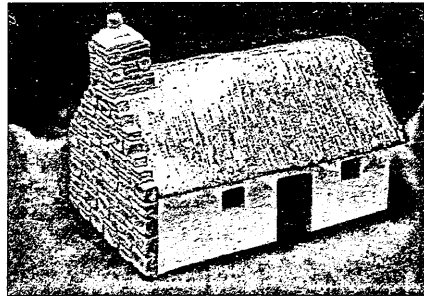


図3 アラン島の家（無釉焼締、屋根のみ鉛釉）
撮影：足立晴彦

作も知られるが、棲家とは大地に育まれる休息の場であり、それは生命の未来への夢想を育むとともに、最期の休息を約束する墓碑でもある。孫たちに遺す記念品としての建物の横には、作者自らの骨壺となる約束の陶磁の家も、そんな説明は一切省いたまま、黙って準備されていた。もちろん、一般の観衆は、そんな秘密はまったく知らずに、玩具の家々の佇まいを無邪気に鑑賞しているばかりだったのだが。

陶磁でできた人形の家

このあたりで、ようやく魔法のありかが、すこしずつ明かされてくる。そう、夢の世界に形を与えた陶磁の家には、人生の階段がそれとなく凝縮されていた。そして様になった焼成粘土の家並みが成立するには、舞台裏では目に見えぬ秘術を尽くすことが不可欠だった。一見なにげない壁面を作るにも、そこには不可視の裏打ちが施され、さらなる工夫が背後に隠されている。試しに、時計台の乗った、塔のある家のみよ〔図4〕。石積みが見事に再現されているのだが、これには実は、木型が使われている。だがそれは、木型の箱のうえに粘土を貼り付ける、というのではない。反対に、作るべき家よりも、さらにひと廻り大きな木型の箱を用意して、その内ノリに沿って、粘土の切り石を、ひとつひとつ積み上げたものなのだ。とりわけ角の面取りの石積みは、別素材の粘土で色を変え、木型の箱の角にそって、凸凹に積み上げてゆく。根気と忍耐なくしては、模型の家といえども、無事

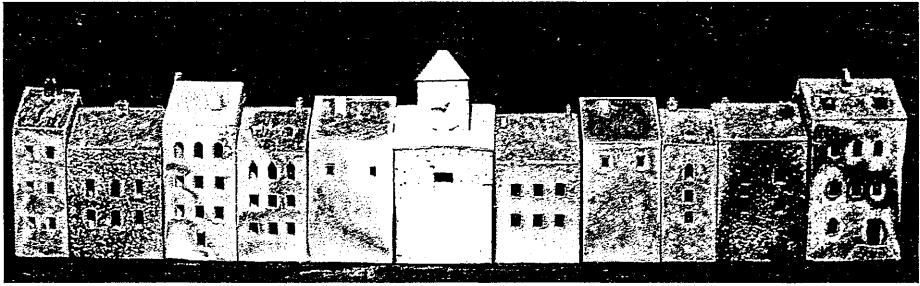


図4 トスカナの家（自然釉焼締） 撮影：足立晴彦

な棟上げすら適わぬ宿命にある。そうして石組みができたところで、ようやく外側の枠を取り去る段取りとなる。こうした周知なる工程を経ないことには、家の外壁が立面として揃わない。おそらくは、粘土の石積み実験に何度も失敗したすえに編み出した、逆転の発想だったのだろう。およそこうしたことは、身をもって粘土と格闘してみないと、わからぬコツだ。

いうまでもないことだが、生の粘土は焼成によって8割ほどの寸法に縮む。それをあらかじめ計算にいれておかねば、魔法の家並みは成立しない。さらに時計台などは、中空の粘土の箱を複数積み重ねる。きちんと寸法があわなければ、時計台にはなってくれない。塔の部分ですっぱりと外してみると、下の部分には、実物の家屋よろしく、粘土で梁や横木が巧みに組み合わされて、構造を支えている。粘土の家の企業秘密が、このあたりに隠されているわけだ。そのうえで、壁面に穿たれた窓が、真っ黒な開口部をつくり、その不規則だが明確な輪郭が、個々の家の和音を奏で、その連なりが、町の旋律を織り成してゆく。

ところが、ここでわれらが粘土細工の棟梁は、またしても新手の悪戯を考案する。信楽焼きの登り窯で焼き上げた渋い色合いの石造りの町なみに、トスカナの町などといった偽名を授けた傍らには、今度は別種のざらざらした肌合いの素焼きの趣ある小箱たちが並んでいる。てっきり素焼きだと思ったのだが、実際には割れるのを避けるために、いきなり1200℃ほどで本焼成して

しまうのだという。その無釉の素肌を漆喰にみたてた左官屋さんは、この壁面にやおらパステル・カラーの着色を施しはじめる。焼き物にアクリル絵の具などとは、正統派の茶碗やからみれば、邪道もよいところだろう。だがこのあたりが、わが魔術師の「遊びどころ」というべきだろう。どうせ「遊び」なのだから、粘土に塗り絵が禁じられているわけではない。スペインでもイタリアでも漆喰の壁には派手な色のペンキが塗られる。ペインティングとは高尚な絵画芸術などでなくて、もともとはペンキ屋さんという、壁面塗装術だった。こうして、いつのまにか、子供たちのための夢の世界そのままの、玩具の町、小人たちの住まう別世界が出現する。

それは、ロイヤル・ダッチ航空の景品につく、デルフト焼きのさまざまな家の模型をかたどったミニチュアの酒瓶よりは、はるかに大きな寸法でありながら、別種の人形の家として、大人をも夢想へと誘うだけの存在感を宿している。原色の壁が鮮やかに映えれば、それはワルシャワの歴史復元地区の市場を囲む町なみを思い出させ、信楽焼きの自然釉は、灰かぶりの効能から、イタリアの風光と、いささか人間臭い、猥雑で薄汚れた町並みの膾炙を想起させもする。はたまた人口光線に照らしだされたピンクを含む赤屋根と白壁との対比は、スペインはアンダルシアの風物とも、南イタリアからアドリア海の丘陵に広がる港町とも、はたまた南ドイツのロマンティック街道の歴史復元都市の、人工的なまでの健康

さとも違うけれど、そのすべてを含みつつ、どこにも存在しない不思議な非實在感を、粘土の肌理のうちに具現する。

休日の藝術が育む夢の平安

この町医者先生の、ヨーロッパへのそこはかたない憧れの原点は、ご幼少のみぎりに目にした絵本のなかの西洋の街並みの風景にあるようだ。それが欧州の石造りの家並みへの、遥かなる未知の郷愁を誘ったものらしい。先生の愛する画家には、『旅の絵本』の安野光雅があり、先生はその絵本を見て陶器の家を設計したのだと告白する。安野光雅は、森鷗外が訳した『即興詩人』に挿絵を施し、1980年代に新潮社の出版情報誌『波』の表紙に連載していた。その記憶に誘われてか、先生は昨年になって初めて鷗外の『即興詩人』を手にとった。文語体の雅文に最初こそ梃子摺ったものの、試しに声に出して朗読するや、思わず釣り込まれ、主人公アントニオの足跡を辿る誘惑に取り憑かれたのだという。デンマークの北の島に生まれ、疎外された天才としての人生を運命づけられたアンデルセンと、近代化のなかの日本の命運を背負った文豪医学者との出会い。そこに醸成された、南欧への強烈な憧れが、ハリコ・アダッチオを旅へと誘った。いまや東洋の老師の風格を少しばかり帯びはじめた先生は、宗教心とは無縁といいながら、キリスト教に興味を抱き、しきりにロシアのアイコンをインターネット・オークションで狙っておられる。そのアイコンや羊皮紙の写本蒐集の傍らには、南蛮人の意匠を描いた、お手製のガラス絵まで添えられている。

おわりに少しばかり、この素人陶藝家の素性にもう一步踏み込もう。万事控えめな開業医は、しかし芯はきわめて一徹。事ひとたび起こらば、毅然たる指揮官ぶりも発揮できる胆力ある人物だ。彼はまた同時に、繊細なる審美家、周到なる設計者、器用なる羊皮紙挿絵技師、細密画の装飾家でもある。みずからの履歴目録も、英語とドイツ語と、医師らしいラテン語とを混用したア

ダッチオ方言により、極彩色の絵筆をもって、擬似ゴシック書体も見事な墨筆で仕立てられている。ご伴侶の説くところによると、この玄人はだしの写本稼業も、ただ二通の証文を懇切丁寧に彫琢しただけで、もうおしまいにしてしまったのだとか。絵文字を駆使した戯作然たる自己紹介によれば、わが医学博士様は、北米は東部の名門たるジョンズ・ホプキンス大学に留学した経歴の持ち主だが、そんな青春の思い出も、いまや含羞のうちに包み込み、ぎゃらりい西利に、たった一週間だけの別世界を演出するや、再び日常の世界へと戻ろうとしておられる。

どういえばよいのだろう。商売としてのゲイジュツなどという営みとは無縁な境地で、ここには、粘土という素材と素直に遊び、みずからの感性を確かめつつ、技法の探求に好奇心を輝かせ、しかしその結果には執着することなく、見果てぬ夢を求めて次々に彷徨する、ひとつの美しい魂の戯れの軌跡が垣間見られるように思われた。ほんとうの心の豊かさとは、こうした慎ましい、他人に見せびらかすでもない、律儀な探求のなかに生まれ、藝術家の自己顕示欲や、世間的な出世欲などといったさかしらとは無縁のままに、いつしれず周囲の人々のうちに分かちあわされてゆくべきもの、なのではなからうか。それを今年の最後の、聖夜のプレゼントとして、読者の皆様ともどもに、すなおに分かちあえることを念じている。

東北大震災の年の暮れに記す。

* 「ハリコ・アダッチオの夢世界」、京都市東山区四条通祇園町南側 京つけもの西利祇園店四階、ぎゃらりい西利にて、2011年11月30日より12月6日まで。案内には「第三回 足立葉津彦 作品展」とある。以上の叙述には、なおいくつも事実誤認などあるだろうが、アダッチオ先生の寛容なるお許しを得て公表させていただく。会場を出ると、すぐお隣にある歌舞伎の南座は、年末の顔見世興業で賑わっていた。本稿を新年号で読者の皆様にお届けする。

あいだ

189

発行＝『あいだ』の会

月刊 2012年1月20日発行 1部360円



兵庫県香美町 photo. Fukuzumi Haruo

あいだ189号 目次

- 絶滅危惧種かもしれない画家として——白川昌生とイルコモンズ両氏の対談を読んで 尾崎愛明 ……2
大地震のあとで——現地に見る表現者たちの活動 細谷修平 ……5
《特別記事》ハマで「ガリ版」にハマって——「新・港村」の一隅から 『HAMArt!』奮戦記 稲村初子／松浦
準／小山田知子／矢吹昇—／新城順子 ……20
《あいだのすみっこ不定期漫遊連載》第84回 ハリーコ・アダッチオの夢世界——あるアマチュア日曜陶藝家の生活と
意見 稲賀繁美 ……29
《連載》戦時下日本の美術家たち (48) 小川原脩 (1) シュルレアリスムから北方ロマン主義へ 飯野正仁 ……35